様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２６６２

研究課題名（和文）高大連携による学際的ライティングの指導プログラムの開発

研究課題名（英文）Developing teachin programs of interdisciplinary writing in high school and university connection

研究代表者
小林　一貴（Kobayashi, Kazutaka）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：３０３４５７７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：主たる成果は、研究課題である「情報・知識へのアクセスを通した問題発見、課題解決のプロセスの解明」に関わるものである。
第1に、学習者のリサーチクエスチョン（RQ）の構築プロセスについて、学際的ライティングの基盤となる知識の結節についての考え方に基づき、関係者ならびにテクストの「声の断片」が書くこととしてのひとまとまりのテクストに具体化される過程に、「声」の積層の位置と相互関係の記述の枠組みが関わっていることを明らかにした。第2に、テクストの生成に関わって書き手を含む参加者が相互に声にどのように言及し、また言及されるのかについて、RQの形成に関わるプロセスを具体的に明らかにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自律した知識創出の主体の育成を目的とする書くことの学習指導におけるリサーチクエスチョンの形成について、高等学校におけるプレゼンテーション活動を取り入れた指導方法を提示した。また、リサーチクエスチョンを形作るための「問い」作りを通した授業実践のモデルを提示した。
これらの方法は、研究成果としての学習過程の分析に基づくものであり、プレゼンテーション活動としての（語ること）とライティング（書くこと）の往還、ならびに学習者の書くことの中核となる「問い」が学習者同士のインタラクションにおける「声」の相互言及を通して生じるという学習の実質の見方を示した。

研究成果の概要（英文）：The study focuses on students’ interdisciplinary writing as an academic literacy practice of high-school and university. In this study, interdisciplinary writing is examined dialogic processes, which is characterized by intertextual processes and making research questions in teaching practice. How to dialogic processes of students’ writing occur? To explore this question, we consider that “projection” systems of language combine voices in several contexts. In this approach, students’ writing is viewed as mutually constitutive systems and forms. Analyzing a students’ writing and small group discussions, we reveal that research questions in writing are constructed by investigation of voices in contexts, and students’ interdisciplinary writing exist within genres including oral discourses. In adopting this study, it is argued, teachers may study how particular discourses in classroom are made to elicit performances of academic writing connected to particular social groups.

研究分野：書くことの学習指導

キーワード：学際的ライティング　アカデミックライティング　声の積層化　問いづくり　ジャンル分析　カンファレンス　オーサーシップ　授業の談話分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

国内の高等学校におけるライティング指導は、カンファレンス指導などの対話型の指導が取り入れられつつあるが、基本的には個人の表現活動による表現技法の指導が中心となっている。同時に、高等学校では専門的知識に接しながら、実社会の課題解決に取り組み、成果を発表するといった課題研究も多く行われつつある。

一方、大学では文献理解とディスカッションを中心とした知識を基盤とするライティング指導が行われている。特に、高等教育において異なる分野が相互に横断的に関わる「学際性」が重視されるようになってきている。大学の初年次教育においても、学際性の理念に基づいたカリキュラム編成が行われ、調査活動やプレゼンテーションに基づく学習が行われている。こうした学習では、いかにして学び手が学際的な実践に取り組み、知識の創出の主体となれるかが問われる。

学際的実践における中心的な役割を果たすのが「学際的ライティング(interdisciplinary writing)」である。学際的ライティングの研究では、専門的でアカデミックな知識は、先行する知識や知識を生み出す実践とのつながり(nexus)において構築されるものとされる。こうした考え方は、一部の高等学校ではコア・スクールによる専門性の育成の指導に取り入れられ、高大接続の柱の一つとなりつつある。実際、テーマや先行研究、調査・実験などの相互関連を基盤として、研究成果を発表する学習が行われてきている。しかし、研究発表はプレゼンテーションによる成果報告に留まることも多く、本来重視されるべき知識の創出と知識への責任意識の形成を核とした学習まで十分至っていない。学際的実践に学び手が参加し、知識創出の主体となるための指導方法の開発が求められている。

そうした中で課題となるのは、学び手が新たな知識を生み出すために先行する知識の価値をどのように自覚し、知識のつながりの中にライティング実践をどのように位置づけていくか、である。ライティングにおける知識のつながりに関する意識は「作者性(authorship)」と呼ばれる。「作者性」を保障するための学習指導のデザインと具体的な学習指導方法の開発が高大連携の中心的な課題となっている。

以上のような背景をふまえ、本研究では、「学際的ライティングの学習過程において、学習者は書くことで生み出される知識に対してどのように責任を自覚し、書き手の「作者性」はいかにして保障されるのか」と中心的な課題として設定した。この課題に対して、高等学校と大学を接続する学習指導の開発に向け、「情報・知識へのアクセス」、「「作者性」の形成」、「学習指導の方法」という観点から研究を進めることとした。

２．研究の目的

ライティング研究に関して、理論と実践の両面についての目的を設定した。

理論的な面として、海外では特に米国とオーストラリアでは知識基盤型のライティングとしてテクスト間相互関連(intertextuality)に基づく研究と実践が蓄積されてきている。こうした研究では、特に話し言葉のディスコースと書くことのジャンルとの相関をどのような枠組みでとらえるかが基本的な課題となっている。ライティングの指導は教室等において話すことを通して行われるが、そうした教室内の談話と書くことの学習との連接について理論的な枠組みを構築することが目的となる。

実践的な面では、ライティング指導における「作者性」の保障に向けて、高等教育だけの問題ではなく、初等、中等教育段階から指導すべき事柄として、ライティング・ワークショップやカンファレンス等の方法がとられてきている。そうした指導のプロセスで重視されるのは、書き手が自らの考えを〈語る―書く〉ことである。当該分野のエキスパートや関係者に対して自らの論を語る、あるいは不特定の相手に対して伝えるという「プレゼンテーション」（質疑、議論を含む）が書き手の「作者性」を高めることが指摘されている。これは、〈今、ここ〉において〈語る―書く〉ことが聞き手、読者との相互作用によって構築され、相対的に「書くこと」の自覚につながるためである。どのように「作者性」が生じるのかを明らかにし、自律した知識創出の主体を育成のための学習指導の要件を提示することが目的となる

３．研究の方法

ライティング研究の理論面として、ジャンル分析におけるテクスト言語学、対話理論、言語人類学、会話分析、等の先行研究を国内の研究状況に照らし合わせつつ、実践への応用を前提とした検討を行った。先行研究において主要な概念となっているのは「対話(dialogue)」である。複数の話者の発話が織りなされて談話が形作られるように、書くことは複数の文脈を持つテクストの相互作用によって形作られる。こうした考え方は、先行する知識との「対話」としての学習の原理を提供し、複数の文脈を媒介する表現活動を通した個人と組織・環境の自己組織化のモデルを提示している。こうしたモデルに見られる課題を検討しつつ、学習場面の談話とライティングを連接する枠組みを構築する。

授業実践に関わる観点から、高等学校の「国語表現」と大学初年次のライティングの授業において、プレゼンテーションの形態（小グループにおける発表と質疑、学級全体に向けたプレゼン

テーション、等）を取り入れた授業を行う。プレゼンテーションと議論に基づくライティング過程を調査、分析し、「作者性」が構築される学習過程の解明を行う。特に、研究代表者がこれまでに行ってきた授業における書くことと話すこと（発表、協議等）の活動を調査、分析に基づき、〈語る―書く〉の往還を通して、自らの書くことについてのリフレクション（振り返り）が行われ、書くことの意識化が生じる過程の解明を具体的に行う。実践開発に関しては、〈語る―書く〉の間に生じるリフレクションの局面を生かした学習を実現するために、どのような問いかけや、どのような話題の導入が有効に作用するのかを明らかにし、談話展開のモデルを取り入れた学習の有効性を検証してきた。こうした〈語る―書く〉を中心とした書くことの学習プロセスは、活動を中心とした初等、中等教育段階にとどまらず、高等教育における学際的ライティングの課題に対する指導の方法を具体的に提示する。

４．研究成果

理論面の成果として、テクスト・ディスコース論に基づく書くことの教育研究をふまえ、書くことの社会文化的コンテクスト、書くことが生成する状況のコンテクスト、書かれたテクストという３つの層からなるモデルを批判的に検討し、このモデルの曖昧さを解消するために、３つの層からなるモデルの相互関係から書くことをとらえるモデルを提示し、事例に基づいてモデルに沿った学習の実際を論じた。

また、書き手が目的、内容、方法を見出していく「足場づくり」の先行事例を検討した。交流活動の役割、書かれたテクストにおける役割、属性の相互交換を通して、学習者が書くことにおける多声性を意識化し、それをふまえて書くことの活動に取り組んでいくという足場づくりのとらえ方を提示した。

その上で、書くことの教育研究の基礎理論としてのジャンル分析(genre analysis)において、ジャンルの性質の二つの側面がどのように論じられてきたかを検討し、整理した。書くことの指導に関して「特定のジャンルを中心とする考え方」とジャンルの生成過程である「プレ・ジャンルを起点とする考え方」があることを指摘した。このジャンルの二面性に関わる理論的な整理に基づいて、国語科の書くことの基盤となる「表現機構」の性質と位置づけについて、従来から問題とされてきた「個性化」と「社会化」の一元化に関する議論を批判的に検討した。検討を通して、内在的視点と外在的視点、自己表現と社会的通達という二つの軸がそれらの議論を構成していることを指摘し、「言語の両義性」を備えた「表現機構」
を見出すことが課題となることを論じた。

実践面の成果として、

高校 1 年生のクラスで行ったリサーチクエスチョンを立てながら報告文を書く授業の学習過程を分析、考察した。交流過程における役割の転換が書くための問いの批判的検討につながり、書くことの再構成つながることを明らかにした。学習課題を学習者自身が自身の「問い」として再構成し、文章を意識的に書いてくような「問いづくり」を核とする授業実践と学習の実際を考察した。書き手の社会的役割と受ける側の属性や知識の接点を見出しながら、書くことが行われていく過程を具体的に示した。

授業で用いるワークシートとその活用について、小論文の構成要素である「問い」について、単に形式だけではなく「既知と未知の混合物」としての問いという考え方から検討を行った。高等学校の国語総合の小論文の文章例を用いて小論文の「問い」を立てるための問づくりのワークシートを作成し、実際の試行を通して問づくりの背景にある文脈の具体化が課題になることを指摘した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 小林一貴	４．巻 592
２．論文標題 書くことの交流における「二重メディア」の連接	５．発行年 2022年
３．雑誌名 月刊国語教育研究	６．最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加藤好広・小林一貴	４．巻 24
２．論文標題 「問い」の属性の具体化を通した書くことの学習指導	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告　教育実践研究・教師教育研究	６．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林一貴・加藤好広	４．巻 38-1
２．論文標題 「問い」の文脈化と再構成を通した書くことの学習過程の考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	６．最初と最後の頁 124-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林一貴	４．巻 38
２．論文標題 小論文の「問い」のための〈問い〉	５．発行年 2020年
３．雑誌名 グループ・ブリコラージュ紀要	６．最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林一貴	4．巻 68-1
2．論文標題 書くことの学習過程におけるジャンルの二面性	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岐阜大学教育学部 研究報告（人文科学）	6．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林一貴	4．巻 68-2
2．論文標題 国語科の書くことにおける「表現機構」の問題	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岐阜大学教育学部 研究報告（人文科学）	6．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林一貴	4．巻 45
2．論文標題 書くことの学習におけるコンテクストの複数性と積層化	5．発行年 2018年
3．雑誌名 人文科教育研究	6．最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林一貴	4．巻 67(2)
2．論文標題 書くことの「足場づくり」としての「混成的談話実践」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	6．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林一貴	４．巻 71(1)
２．論文標題 語り直しにおける声の混成性から見た書くことの学習過程	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	６．最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関